

# 地域環境スチュワードシップ概念の整理と フレームワークの提示

滝澤恭平<sup>1</sup>

<sup>1</sup>学生会員 九州大学大学院 (〒819-0395福岡市西区元岡744, E-mail: twky00@gmail.com)

地域の市民・住民が主体的、自律的に環境や公共空間に関与する概念として「スチュワードシップ」概念の既往研究レビューを行い、概念の整理、フレームワークの提示を研究目的とする。スチュワードシップは土地の倫理から、地域の環境に対する市民活動、グローバルな地球環境まで、責任を持った保全、管理、利用を表す概念として、持続可能性が求められる現代では適用範囲が広がっている。地域スケールのスチュワードシップの重要性を踏まえ「地域環境スチュワードシップ」を定義し、社会、生態系の背景の元、地域主体の動機と地域資本を活用する能力が組み合わせり、スチュワードシップ行動が実行され、社会、生態系に対する結果が出現する地域環境スチュワードシップ構成要素のフレームワークを提示した。

**キーワード:** スチュワードシップ, 自治, 参加, 地域資本, 維持管理

## 1. はじめに

地域の社会基盤における環境や公共空間の整備、維持管理において地域の住民・市民などの主体的、自律的な活動や取り組みは極めて重要である。その理由としては、第一に、管理者だけでは把握し得ない地域固有の環境情報や歴史性、利活用のニーズなどを地域の活動主体の参加・協働プロセスを通じて空間整備に反映することにより、地域のアイデンティティを活かした良好な環境整備が可能となることが挙げられる。第二に、維持管理段階において、地域の社会基盤としての水辺や街路などの公共空間における地域の住民・市民の主体的な関与、自律的な管理・運営の取り組みを通して、地域の空間の持続可能なマネジメントが可能となり、地域の再生や持続が実現しうる可能性があるからである。

本研究では、地域の市民・住民の主体的な地域の環境や社会基盤への参加や関与の解明という研究課題に対し、スチュワードシップ(Stewardship)という概念を分析枠組みとして提示し、その概念の整理とフレームワークの提示を試みる。スチュワードシップとは、環境や土地に対して責任を持った保全や管理を主体的に行う取り組みのことで、「土地所有者や資源利用者が、土地とその自然、文化遺産を管理・保護する責任を生み出し、育み、可能にするための努力」<sup>1)</sup>などと論じられる。近年、ローカルスケールからグローバルスケールまで資源の持続可能性、人間社会の福祉(well being)を脅かす環境悪化の抑制を達成するための責任ある行為、目標、原則、政策を表す言葉として広がっている<sup>2)</sup>。1990年代後半には、公園、

河川、河口、海岸、原生域で保全活動を行うスチュワードシップ組織が北米を始めとする殆どの英語圏の地域、国レベルで存在していることが報告されている<sup>3)</sup>。都市においても水辺や湿地、公園や庭園、コミュニティガーデン、街路樹などにおいて様々なスチュワードシップ活動が行われていることが報告されている<sup>4)</sup>。環境へのスチュワードシップは、コミュニティの回復力の源としても機能し<sup>4)</sup>、環境スチュワードシップはコミュニティへ寄与するものとしても捉えられる。さらに、スチュワードシップは強制ではなく自発性に基づく参加<sup>5)</sup>であることが特徴である。

住民・市民の社会基盤への関与を通じた地域の持続・再生プロセスにおいても、自発的なボトムアップのプロセスや、環境再生を育む主体のコミットメント、地域コミュニティやソーシャル・キャピタル醸成への貢献、責任を伴った共同による維持管理への参加など、スチュワードシップ概念が適用される領域が存在することが考えられる。よって、本研究においては、地域環境に対するスチュワードシップ概念を既往研究の文献を整理した上で定義し、その構成要素のフレームワークを提示することを研究目的とする。

## 2. スチュワードシップ概念の研究動向

### (1) スチュワードシップの基本的概念

スチュワードの語源は、地所や大農場などの家やホール(stig)の概念と、警備員(ward)の概念を組み合わせた家の守護者という意味である<sup>6)</sup>。イギリスでは、14

世紀後半から、雇用主に代わって不動産の事務を管理する者という意味で使われてきた。キリスト教社会においては、神から委ねられた被造物としての地上の財産を責任をもって管理する人間という神学的な概念も背景にある<sup>7)</sup>。ステewardシップの一般的な意味は、委託された財産や資源を注意深く、責任をもって管理することである<sup>8)</sup>。ステewardシップという言葉の範疇は、今日では拡張され、環境、経営、金融、農業、水産業など様々な分野で使用されている。

環境分野では、ステewardシップは、持続可能性の課題への対応を明確にし、説明するために使われることが多くなってきている<sup>9)</sup>。環境思想や環境倫理学では、ステewardシップという概念は長い歴史を持ち、天然資源の賢明な利用や責任ある利用という意味でよく使用されてきた。Leopoldは「共同体という概念の枠を、土壌、水、植物、動物、つまりはこれらを総称した「土地」まで拡大した倫理」<sup>10)</sup>としての土地倫理(land ethic)を主張している。「人という種は、土地や自然の征服者でなく、その一構成員、一市民」<sup>10)</sup>という視座を基底に、人と土地／自然の健全な関係に対する社会の責任を認識する土地倫理は、環境分野のステewardシップの基本的な考え方に反映されている。

昨今では、環境分野におけるステewardシップは、生物多様性の劣化、レジリエンスに対する取り組み、生態系サービスの回復、資源管理などの様々な領域で、農村環境、都市環境、陸生、海洋、水生、空中のあらゆる環境において、人間社会と環境や生態系の相互作用を改善する取り組みとして幅広く使用されている。Enqvistaによると、ステewardシップは、「ランドスケープや環境の管理、政策、計画において、技術的な管理を重視したアプローチから、参加型、クロススケール、学際的な、共通の価値観に根ざした取り組みを重視したアプローチへの移行を示す言葉」<sup>11)</sup>として使われている傾向がある。ステewardシップには、それぞれの学問的な視座やコミットメントにおいて、様々な枠組みが登場しており、たとえば、「ランドスケープ・ステewardシップ」(Landscape Stewardship)、「エコシステム・ステewardシップ」(Ecosystem Stewardship)、「アース・ステewardシップ」(Earth Stewardship)、「プラネタリー・ステewardシップ」(Planetary Stewardship)、「バイオスフィア・ステewardシップ」(Biosphere Stewardship)などの広がりを見せている。制度や政策では、FSC (Forest Stewardship Council : 森林管理協議会) やMSC (Marine Stewardship Council : 海洋管理協議会) などの認証制度、イギリスにおける環境ステewardシップ事業 (Environmental Stewardship Scheme) による環境支払制度、アメリカの森林ステewardシッププログラム (Forest

Stewardship Program) など様々なステewardシップ施策が展開されている。さらに、地域における市民組織や環境団体の活動、実践においても、ステewardシップという言葉は幅広く使われている。ステewardシップの考え方への関心が高まり、普及した要因として、急速に増大する生態系の劣化と社会的不平等が関連した課題が世界的に認識されてきたことが考えられている<sup>9)</sup>。ステewardシップには統一的な見解、定義は存在しないが、時代に応じて、その内容は少しずつ変化してきた。

ステewardシップを日本語に置き換えることは難しいが、近接概念として「守」という語が存在する。「家守」とは、江戸時代、地主・家主に代わってその土地・家屋を管理し、地代・店賃を取り立て、また、自身番所に詰めて公用・町用を勤めた者である<sup>12)</sup>。地主から支払われる管理料で家計を立て、公共サービスを提供し、まちを治めていた「守」は、イギリスにおけるステewardシップの語源と近い。水環境に関しては、川を守る「川守」、水循環や地下水を守る「水守」などの語が存在し、現代でも、熊本市の地下水や水環境の保全やPRを行う人材を登録、交流、育成する「くまもと水守」<sup>13)</sup>や、日野市の用水維持の担い手育成を目的とした「用水守」<sup>14)</sup>など制度として運用されている。

特に環境に関するステewardシップとしての「環境ステewardシップ」(Environment Stewardship)と、社会生態系システム(Social-ecological systems)をベースとした生態系ステewardシップ(Ecosystem Stewardship)について論じた後、本研究でのステewardシップである「地域環境ステewardシップ」(Local Environment Stewardship)の定義を行い、その構成要素を以降に論じる。

## (2) 環境ステewardシップ(environment stewardship)

WorrellとAppleby(2000)は、環境ステewardシップ(environment stewardship)を以下のように定義している。

ステewardシップとは、個人的なニーズだけでなく、社会や将来の世代、他の種の利益 (interests)を十分かつバランスよく考慮し、社会に対して重大な責任を負う方法で、自然資源を責任を持って利用 (保全を含む) すること<sup>15)</sup>。

個人的な利益だけでなく、集団や、時間的にも離れた将来世代、人間以外の生物種のインタレストまで配慮していることが特徴である。ステewardシップ活動は、個人的な利益ではなく、他者やコミュニティ全体のインタレストのために行われることは度々指摘されており、ステewardシップの前提となっている<sup>16)</sup>。

(2012)は、Worrell と Applebyの上記の定義を参照しつつ、環境スチュワードシップに関する2点の重要な特徴を次のように述べている。

第一に、競合する「利益・インタレスト」(interests)の「多元性」(pluralism)を認識すること。第二に、社会的な利益と負担の分配において「正義、寛容、公平」といった道徳規範との全体的な整合性に配慮することである<sup>17</sup>。

ここで述べられているのは、まず、自然や環境に対する人びとのインタレストには、直接的な道具的価値以外にも多様な価値が内在することを認めることである。たとえば、生物多様性条約の本文冒頭には「生物の多様性が有する内在的な価値並びに生物の多様性及びその構成要素が有する生態学上、遺伝上、社会上、経済上、科学上、教育上、文化上、レクリエーション上及び芸術上の価値を意識し……」<sup>18</sup>と書かれており、生物多様性には「内在的な価値」、およびその他の様々な価値が存在することを前提としている。二点目は、これらの環境価値の多様性を前提として、次世代や他の種など環境に含まれる様々なステークホルダーのインタレストをバランスシートに載せて公正、寛容、公平に考慮した上で、環境や資源を保全または使用する必要があるということである。

Welchman<sup>17</sup>は以上2点の注意点を踏まえた上で、環境スチュワードシップを以下のように定義している。

環境スチュワードシップとは、自然環境に影響を与える人間の活動を責任を持って管理し、地球上の人間や他の生物の将来の世代のために、自然資源や価値の保全・保護を確実にすることであり、また、社会に対して自分の行動に対する重大な責任を受け入れることである<sup>17</sup>。

環境スチュワードシップの目的は、環境システムの完全性と、人間や他の生命体へのサービスを回復または維持するために、人間の行動を管理することである。Welchmanの上記2点の条件は、様々な環境スチュワードシップに関する言説に適用されており、たとえば、Bennettら<sup>25</sup>が2018年に提案した地域環境スチュワードシップ(local environment stewardship)の定義は以下のようになっている。

さまざまな動機と能力レベルを備えた個人、グループ、またはアクターのネットワークが、多様な社会生態系的(social-ecological)状況で環境および/または

社会的成果(outcome)を追求するために、環境を保護、ケア、または責任を持って使用するためにとる行動<sup>25</sup>

Bennettらの定義では、ステークホルダーの多様性自体に具体的な記述が加わったことと、アウトカムの概念の導入、保全の文脈として社会生態系的な視点が導入されたことが特徴である。以上の環境スチュワードシップの定義の変遷を振り返ると、定義自体に、環境に関わるグローバルなアジェンダや言説を取り込みながら、より体系的、統合的に人間と自然・環境との関係性を説明する表現に変化してきたことがわかる。

### (3)生態系スチュワードシップ(ecosystem stewardship)

生態系スチュワードシップ(ecosystem stewardship)は、「社会生態系システム」(Social-ecological systems)のアプローチとレジリエンスの思考に基づいた概念である。Chapinらは、生態系スチュワードシップを「生態系の回復力と人間の長期的な幸福の両方を高めるために、生態系と社会の変化の道筋を積極的に形成するように社会を導く枠組み」<sup>19</sup>と定義している。生態系スチュワードシップの重要な要素としてa)行動の動機としての生態系の回復力と人間のウェルビーイング(well-being)という2つの目標、b)スケールを超えた生態学および社会的プロセスの統合、c)過去の回復だけを求めるのではなく、未来を形成する行動の重視を挙げている<sup>19</sup>。生態系スチュワードシップは、人間のウェルビーイングを支える生態系サービスの供給と利用機会を維持するために、複雑で不確実な社会生態系に対応、形成するための戦略であり、保全科学のこれまでの取り組みの強みの上にさらに拡張、構築されるものとされる。「生態系と社会の利益のために社会生態系の変化の経路を積極的に形成すること」<sup>20</sup>が強調され、社会生態系に介入する未来志向の行動指針であるところが見て取れる。

また、Cockburnらは、社会生態系システムに環境スチュワードシップの倫理的な基盤を取り入れた中間的な概念として「社会生態学的スチュワードシップ」(Social ecological stewardship)を提案し、「現在および将来の世代の人間と地球上の他の生物のために、多様な生態系サービスと価値の供給を維持するために、人間が社会生態学的システムと倫理的かつ責任ある相互作用を行うこと」<sup>21</sup>と定義している。生態系スチュワードシップ、社会生態系スチュワードシップは、人新世において人間の影響が地球の隅々にまで覆い尽くし、地球規模の様々な限界が露呈した時代認識において、人間社会と生態系が複雑に絡み合い、ダイナミックな相互作用を行う地球システムの持続可能性を高めるためのアプローチと言うこ

とができる。プラネタリースチュワードシップ、生物圏スチュワードシップ、アーススチュワードシップなどもこの文脈のバリエーションとして捉えることができる。

### 3. 地域環境スチュワードシップ (local environment stewardship)の提示

#### (1) 地域環境スチュワードシップ概念の定義

地域のスケールで行われるスチュワードシップの重要性が様々な既往研究で示されている。Svendsenによると「スチュワードシップは地域の行動や決定が保全に影響を与えるような地域規模(local scale)で、最も容易かつ迅速に実施される」<sup>19</sup>。Bennettら<sup>25</sup>は「環境スチュワードシップの枠組みは、地元の人びとが、自身のニーズや生計のために接近し、接続され、場合によっては依存している環境をケアする上で、しばしば果たしている中心的な役割に焦点をあてる」と述べている。Krasnyらは「都市や人間が支配する緑地インフラやコミュニティのウェルネスを高めるために行われる地域の環境スチュワードシップ活動」としての市民エコロジーの実践<sup>26</sup>を報告している。地域におけるスチュワードシップの取り組みは、「コミュニティに根ざした保全」(community-based conservation : CBC), 「コミュニティに根ざした管理」(community-based management : CBM), 「その他効果的な地域ベースの保全対策」(other effective area-based conservation measures : OECM)などの地域コミュニティベースを重視する昨今の環境保全や管理に関する政策やプログラムの方向性と一致する。

本研究では、スチュワードシップの対象を地域の環境に対する取り組みとする。なお、「地域」とは都会に対する地方という意味での地域でなく、地域住民が暮らし

や生活を営み、働きかけることができる地元の圏域のことである。英語での表現はlocalという言葉に近く、「その土地の、ある特定の地域の、現地の」という意味に近い概念となる。Localとは、「抽象的な環境原則や価値観が、身近な生活の質と交差するスケール」<sup>29</sup>である。また、地域において環境に関する活動を行う個人、グループ、ネットワークとしての主体を地域主体(local actor)とする。

本研究の対象とする「地域環境スチュワードシップ」(local environment stewardship)の定義を以下に示す。

地域において、様々な動機と能力を持つ地域主体(個人、グループ、ネットワーク)が、主体的な実践と協働を通して、人びとと地域の環境との結びつきを取り戻し、環境の配慮、保全、再生、維持管理を行う取り組み。

この定義では、現代の地域、とりわけ都市域の地域において、人びとやコミュニティと環境との結びつきが失われ、または見えにくくなっているという事態を現状認識とし、様々な動機や能力を持つ多様な存在である地域主体が、主体的な実践活動や地域主体間の協働を経て、地域の環境に対する配慮や保全、再生、維持管理などのスチュワードシップ行動を推進し、人びとやコミュニティと環境の結びつきを取り戻し、地域社会と環境両方にとっての便益を生み出していくプロセスに焦点を当てている。

#### (2) 地域環境スチュワードシップ概念の構成要素

スチュワードシップ概念がどのような要素から構成されるかに関しては、2010年代以降に、それまでに蓄積されてきたスチュワードシップ研究の文献レビューを通し

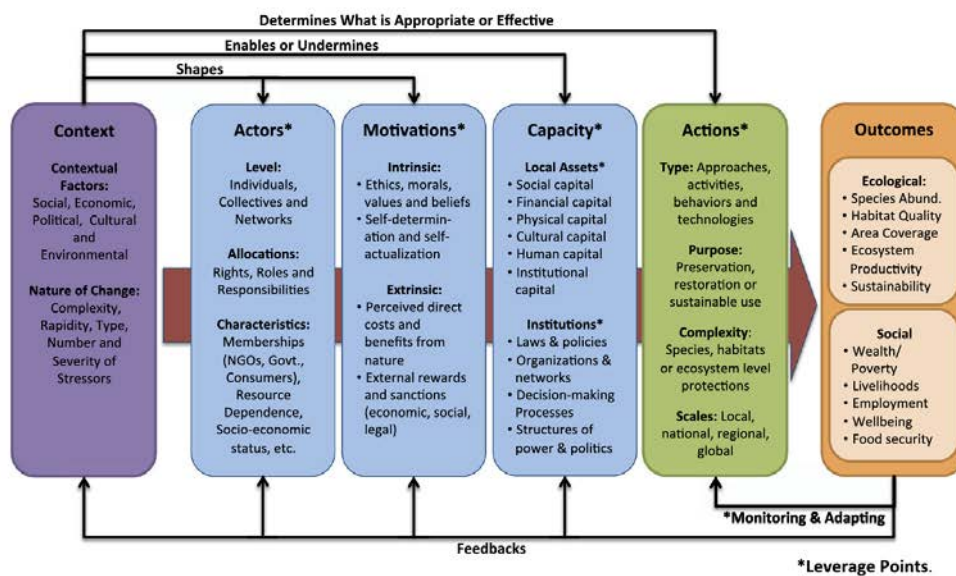


図-1 Bennett らによる地域環境スチュワードシップ要素のフレームワーク (Bennet, 2018)

た要素の分類が試みられている。

Romoliniら<sup>24)</sup>は、環境スチュワードシップに関するいくつかの文献レビューを通して4つの特徴を示している。第一にレオポルドから継承されてきた自然や生態系、地球に敬意を払い、それらの一員として謙虚さを持って行動する「倫理や責任」(Ethic or Responsibility)、第二に個人的レベルから集合的、社会的レベルまでに渡って、外発的または内発的な要因から駆動される「動機」(motivation)、第三に様々なステークホルダーの協働やコミュニティの資源管理、能力開発などを含む、空間における単発でない「プロセス」(process)、第四に社会的な変化や、場所や自然との関係性の改善が含まれる「結果／アウトカム」(outcome)である。

Bennett<sup>25)</sup>らは、スチュワードシップに関する経験的または理論的な文献についてのレビューを行い、「主体／アクター」(actors)、「動機」(motivation)、「能力／キャパシティ」(capacity)、「行動」(action)の連なりより生じる「結果／アウトカム」(outcome)と、これらの背景としての「文脈／コンテキスト」(context)から構成されるフィードバックシステムとしての地域環境スチュワードシップについてのフレームワーク(図-1)を提示している。アクターでは、個人から集団、ネットワークまでのレベルが挙げられる。「動機」は、倫理や自己決定などの内的要素と、経済的利益などの外的要素に分類され、「能力／キャパシティ」は、地域コミュニティの資源と制度に関するものに分けられる。「行動」では、ローカルからマクロまでのスケールの差異および相互作用が存在し、「結果／アウトカム」では生態系的側面と社会的側面の両面へ関わる結果が生まれることが示されている。

Enqvistaら<sup>26)</sup>は、スチュワードシップ研究に関する初の質的なシステマティックレビューを行い、既往文献のスチュワードシップ概念に関して、「倫理」(ethic)、「動機」(motivation)、「行動」(action)、「結果／アウトカム」(outcome)という4つの異なる意味を分類している。Enqvistaらによると、1990年から2016年に出版された「スチュワードシップ」というタイトルやキーワードを含む

査読付き論文は、2000年代半ば以降に急増しており、4つの分類の中では「行動」が最も多く、他の3つの合計よりも多い891回同定されている。二番目に多いのは「結果」で、論文アブストラクトでは「行動」と共にコーディングされる場合が多く、2010年以降に34%まで増加していることが報告されている。「倫理」論文の中で最も顕著なテーマは「生態系の科学と管理に情報を提供する倫理や原則」であり、二番目は市民や法律などの「公共の原則」に関するものである。「動機」に関する論文では、スチュワードシップを集団レベルでなく個人レベルで扱うものが多く、社会的動機が環境的動機より高い結果が多かったことが示されており、この理由として、社会科学系、行動科学的な実証主義的なジャーナルに多く投稿されている点が挙げられている。「行動」に関する論文アブストラクトのコーディングにおいて、「倫理」、「動機」、「結果」と共起関係が高いことが示されている。「結果」の多くの論文では、特定の政策やアクションの介入による環境的成果を扱っていることが報告されている。

Enqvistaら<sup>26)</sup>は、上記のシステマティックレビューを経た上で、これらの領域をつなぐ境界概念として、ケア(care)、ナレッジ(knowledge)、エージェンシー(agency)の3つの概念を提案している(図-2)。ケアは「スチュワードシップを支える愛着と責任感を意味し、個人的な価値観、美的観念、アイデンティティー、感情に加えて、道徳やイデオロギーなどの集団的、社会的な概念も含まれる」<sup>26)</sup>とされ、「保全における関係性の価値観や、生態系管理と変容の研究における場所の感覚」<sup>26)</sup>などが例として挙げられる。ナレッジは、「管理されている種、資源、技術、景観、社会生態系に関する基本的な情報とより深い理解、およびそのダイナミクスに対応し、そこから学ぶ能力」<sup>26)</sup>を指し、「従来の科学と科学的手法、先住民の知識、実地の実践と経験的知識、ソーシララーニング」<sup>26)</sup>などの様々な知識体系から得られることが特徴である。エージェンシーとは「スチュワードシップ活動に従事し、世界に効果をもたらす個人、組織、共

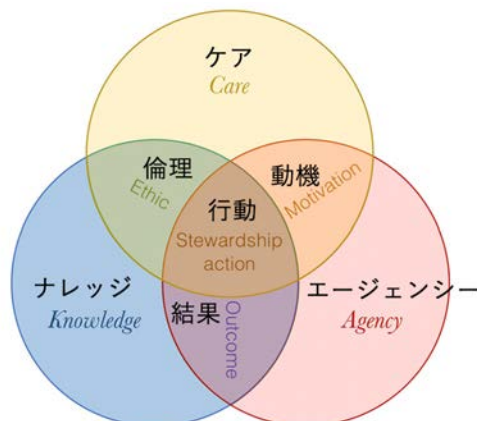


図-2 スチュワードシップの境界概念としてのケア、ナレッジ、エージェンシー(Enqvistaら(2018)を基に加筆)

同ネットワークの能力とキャパシティ」26のことであり、「緑地ガバナンスに従事する地域住民、コミュニティのリーダーシップ、草の根イノベーション」26などが挙げられている。

以上のステewardシップ概念の構成要素の先行研究では共通点が存在する。ステewardシップには、内的要因または外的要因から成る「動機」が存在し、一連の「行動」のプロセスに伴う「結果」を生じさせるという点である。また、倫理は、動機や行動に対して根本的な影響力を持つことも重要である。

本研究では、これまで紹介したステewardシップ概念の構成要素に関する先行研究の知見を踏まえ、特にBennettらのフレームワーク25を参考とし、ステewardシップ概念の構成要素を「動機」(Motivation)、「地域資本活用能力」(Capacity of Local Asset)、「行動」(Action)、「結果」(Outcome) および社会的・生態的背景 (Social Ecological Context) とし、その全体像を図-3に地域環境ステewardシップの構成要素フレームワークとして示す。

ステewardシップは責任感を伴った行為であるので、その発現のためには、主体/アクターにまずステewardシップへと駆動する動機が必要となる。動機は、内的動機と外的動機に分かれる。倫理は内的動機の中でも最も根本的なもので、Leopold<sup>27</sup>が述べるような土壌、水、植物、動物などの自然の共同体の一員としての人間による土地への倫理(land ethic)を始め、土地や資源に対する責任の感覚、世代間の公平性などステewardシップに関する既往文献で様々に論じられてきた。内的動機には、

場所に対する愛着や景観に対する好みなどの、場所への感性的要素や価値観も存在する。これらは個人的なものでありながら集合的な規範でもあるような性質を持つ。その他の内的動機には、心理学で自己決定理論(self-determination theory)<sup>28</sup>として知られる「自己決定」(self-determination)に関するものが存在し、Deci & Ryan<sup>28</sup>により、「自律性 (autonomy) , 関係性 (relatedness) , 有能感 (competence) 」の三つの基本的な心理的欲求の充足が健康や内発的な動機づけを促進するとされている。自律性とは自己の行動を自分自身で決定し、一貫性を保ちたいという心理的欲求であり、関係性とは、他者や集団と緊密につながりたいという欲求で、有能感とは、自身の能力を発揮したいという欲求である。ステewardシップ文献では、環境ボランティアの社会集団への所属欲求<sup>29</sup>や、環境ステewardシップネットワークへの参加が帰属意識、環境配慮、個人的な学習欲求に動機付けられていた研究結果<sup>30</sup>などが知られている。外的動機は、経済的利益<sup>31</sup>や、社会的制裁、法的制裁などによる動機が存在する。経済的動機には、環境配慮型製品のプレミアム価格やエコポイント制度、罰金などが含まれる。なお、外的動機より内的動機の方が強固で耐久性があることは研究結果がある<sup>32</sup>。

地域環境ステewardシップが主体/アクターにより発現されるには、動機だけでは不十分であり、ステewardシップを実行する能力が必要となる。ステewardシップの能力を促進または制限する要因として、Bennettらは「地域コミュニティの資源と広域のガバナンス」

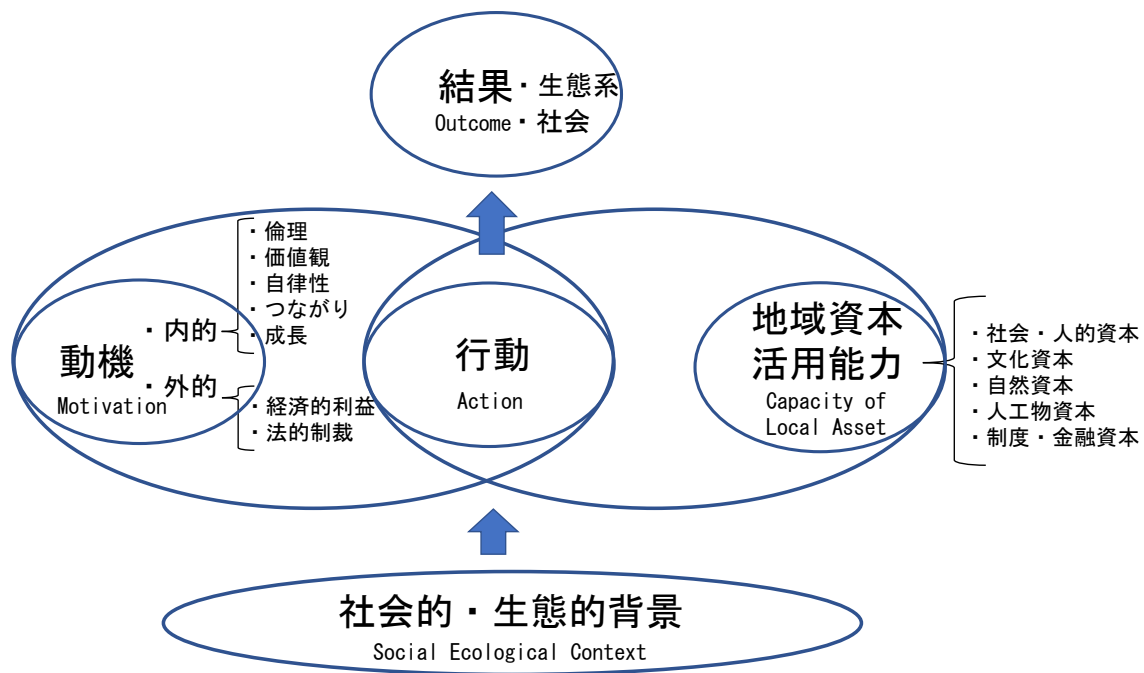


図-3 地域環境ステewardシップ概念の構成要素フレームワーク (筆者作成)

表-1 地域環境スチュワードシップを可能にする能力を与える地域資本分類 (Bennett et al(2018)を基に作成)

地域資源	内容
社会・人的資本	スチュワードシップを支える信頼と互恵を促進する、友情、親族、職業ネットワークなどの非公式、公式な関係。 スチュワードシップを可能にする、教育、知識、リーダーシップ、過去の経験、意識、スキル、人口的要因（年齢や健康状態など）など、個人やグループの属性。
文化資本	グループのアイデンティティの中心であり、スチュワードシップを支える、場所、伝統、知識、習慣、工作物などの存在と、それらのつながりを維持するプロセス。
自然資本	地域コミュニティを支える、また、スチュワードシップの対象としての生態系、生物、水循環、流水などの自然環境の要素。
人工物資本	個人や集団が生活資源や物的資源をスチュワードすることを可能にする、技術（伝統的なものと近代的なもの両方）やその他のインフラ。
制度・金融資本	制度システム（法律、政策、公式および非公式の組織、意思決定プロセス）や権力と政治に関する構造的プロセス（経済的不平等、差別、排除のレベルなど）を含むガバナンスの結果として、地域コミュニティが資源をスチュワードするために利用できる権限、代理権、選択肢。 個人または集団が利用可能で、スチュワードシップ活動を行う能力と手段を提供する金銭的資源（収入、信用、負債、富、貧困など）。

25)を挙げている。Bennettらが論じる能力＝「キャパシティ(capacity)」とは、主体自身がもともと持つ能力というよりは、主体が、地域や社会から動員可能な潜在的な能力のことを示している。上記の意味で、「キャパシティ(capacity)」は、厚生経済学者であるSenの述べる、人間の暮らしを実現する様々な機能の選択可能性の大きさとしての「ケイパビリティ(capability)」概念にも近い。地域コミュニティの能力は、動員できる地域資源によって影響を受けることはSen<sup>39)</sup>も指摘している。よって、ここでの能力は地域資本活用能力という意味で使用される。

Bennettらは、持続可能なコミュニティ開発に関する研究結果<sup>39)</sup>を踏まえ、地域資本として「社会資本（関係、信頼、ネットワーク等）、文化資本（伝統、知識、慣習等）、金融資本（収入、信用、負債等）、物理資本（インフラ、技術等）、人的資本（教育、スキル、リーダーシップ等）、制度資本（エンパワーメント、エージェンシー等）」25)を提示している。Bennettらの地域資本の分類や、地域資本を活用したコミュニティディベロップメント(Asset Based Community Development)の研究結果<sup>39)</sup>を踏まえ、表-1に地域環境スチュワードシップを可能にする能力を提供する地域資本の分類を社会・人的資本、文化資本、自然資本、人工物資本、制度・金融資本として示す。Enqvistらの提案する境界概念としての「科学的手法、先住民の知識、実地の実践と経験的知識、ソーシャルラーニング」26)などの「ナレッジ」も、これらの文化資本、社会・人的資本などにまたがる地域資本として捉えることができる。制度・金融資本に含まれるガバナンスがスチュワードシップ能力に与える制約の例として、地域の取り組みと一致しない外部からのプログラムが導入されると地域主体のスチュワードシップが阻害されることが報告されている<sup>39)</sup>。

主体/アクターにおいて動機と、能力の両者が充足することによって、スチュワードシップの行動が実行される。スチュワードシップ行動は、環境を保全、再生、または持続的に使用するために適用される一連のアプローチ、アクティビティ、作業、技術を指し、ローカルスケールからマクロスケールまで様々なスケールで発生する可能性がある<sup>25)</sup>。スチュワードシップ行動は、目的に応じて多様な手法が存在し、アユの保全など特定の種を対象とするものから、湿地など生態系を対象とするもの、都市の緑地やコミュニティガーデンなどの公共空間を対象とするものなど、様々なタイプのスチュワードシップ行動が存在する。

主体/アクターがスチュワードシップ行動を実行した作用として、環境や地域、社会においてスチュワードシップの結果や成果が出現する。スチュワードシップ結果は、生態系または自然と、社会の両方の側面に出現することが重要である。また、その結果が、意図された結果と意図されていない結果の両方<sup>39)</sup>、顕在的なものと潜在的な結果<sup>39)</sup>を含む可能性があることは注意が必要である。社会的・生態的背景 (Social Ecological Context) は、地域コミュニティや環境のスケールを越えて外部から影響を与える背景要因を示している。外部の要因としては、地域の外部で展開している社会的、経済的、制度的な動向や、地域のスケールを越えて機能している生態系、気候、水循環などの影響がある。例えば、気候変動の影響は地域の資源や人びとの積極的な対応能力に深刻な影響を与える可能性がある<sup>39)</sup>。

以上に論じたように、図-3のスチュワードシップの構成要素フレームワークでは、スチュワードシップを駆動させる要素を動機と地域資本活用能力に分け、両者の合成ベクトルとしてスチュワードシップ行動が発生し、行

動の結実としてのステewardシップ結果が生態系と社会に出現するというステewardシップの展開プロセスも含んだ全体像を示した。

## 5. おわりに

既往研究より、ステewardシップは伝統的な土地への倫理から、地域の環境に対する現代の市民活動、グローバルな地球環境まで、人びとの環境や資源に対する責任を持った保全、管理、利用を表す概念として使われ、環境と社会の持続可能な関係性構築が喫緊の課題として浮上している現在においては、個人や組織、ネットワークが主体性、自律性を持って環境への取組みを行うことが求められており、その適用範囲は広がっていることを整理した。

ステewardシップに関する様々な枠組の中で、環境ステewardシップ、生態系ステewardシップを取り上げ、そのエッセンスを抽出した。環境ステewardシップは、自然環境への人間の影響を把握し、地球上の人間や他の生物の将来の世代のために、自然資源や価値の保全を確実にし、また、社会に対して自分の行動に対する責任を受け入れることであること。生態系ステewardシップは、「社会生態系システム」(Social-ecological systems)のアプローチとレジリエンスの思考に基づいた概念であり、人新世において人間の影響が地球の隅々まで覆い尽くし、様々な限界が露呈した時代において、人間社会と生態系が相互作用を行うシステムの持続可能性を高めるアプローチであることを示した。さらに、地域のスケールでステewardシップを行うことの効果や重要性、地域の人びとやコミュニティの地域環境に対する実行力ある役割の重要性が指摘されていることを踏まえ、本研究で使用するステewardシップの定義として、「地域環境ステewardシップ」を提示し、「地域において、様々な動機と能力を持つ地域主体（個人、グループ、ネットワーク）が、主体的な実践と協働を通して、人びとと地域の環境との結びつきを取り戻し、環境の配慮、保全、再生、維持管理を行う取り組み」と定義した。地域環境ステewardシップの構成要素を既往研究から整理し、社会、生態系の背景の元、地域主体の動機と地域資本を活用する能力が組み合わせり、ステewardシップ行動が実行され、社会、生態系に対しての結果が出現する地域環境ステewardシップ構成要素のフレームワークを提示した。地域環境ステewardシップの発現を通じた社会基盤への住民・市民の関与は、地域の持続性を高め、自治を実現する上で重要であり、地域環境ステewardシップの都市と農村での比較や、参加、協働など類似概念との比較などを今後の研究課題としたい。

## 参考文献

- 1) Brown, Jessica & Mitchell, Brent: The Stewardship Approach and its Relevance for Protected Landscapes. The George Wright forum. 17.2000
- 2) Chapin III FS, Kofinas GP Folke C, Chapin MC. Principles of ecosystem stewardship: Resilience-based natural resource management in a changing world. New York: Springer; 2009
- 3) WELCHMAN, J.: A Defence of Environmental Stewardship. *Environmental Values*, 21(3), pp. 297-316, 2012
- 4) Krasny, M.E. and Tidball, K.G.: Civic ecology: a pathway for Earth Stewardship in cities. *Frontiers in Ecology and the Environment*, 10, pp. 267-273, 2012
- 5) Prakash, A. and Potoski, M.: Voluntary environmental programs: A comparative perspective. *J. Pol. Anal. Manage.*, 31, pp. 123-138, 2012
- 6) F. Stuart Chapin III, Martin Sommerkom, Martin D. Robards, Kevin Hillmer-Pegram, *Ecosystem stewardship: A resilience framework for arctic conservation*, *Global Environmental Change*, Volume 34, pp. 207-217, 2015,
- 7) Nash, R. F.: *The Rights of Nature: A History of Environmental Ethics*, University of Wisconsin Press, pp. 95-99, 1989.
- 8) Meriam-Webster: stewardship, <https://www.merriam-webster.com/dictionary/stewardship>
- 9) Cockburn J, Cundill G, Shackleton S, Rouget M.: Towards Place-Based Research to Support Social-Ecological Stewardship. *Sustainability*. 10(5), pp. 14-34. 2018
- 10) Leopold, Aldo: *A Sand County almanac, and Sketches here and there*, Oxford Univ. Press, 1949
- 11) Johan Pegañha Enqvist, Simon West, Vanessa A. Masterson, L. Jamila Haider, Uno Svedin, Maria Tengö: Stewardship as a boundary object for sustainability research: Linking care, knowledge and agency, *Landscape and Urban Planning*, Volume 179, pp17-37, 2018
- 12) 精選版日本国語大辞典, 小学館
- 13) 熊本市: くまもと水守, 2012  
[https://www.city.kumamoto.jp/kankyo/hpkiji/pub/Detail.aspx?c\\_id=5&id=20559](https://www.city.kumamoto.jp/kankyo/hpkiji/pub/Detail.aspx?c_id=5&id=20559)
- 14) 黒田 暁, 西城戸 誠, 舩戸 修一: 農業用水の「環境用水」化に見る資源管理の編成可能性——東京都日野市の都市における農業用水路の存続をめぐる——, *環境社会科学研究*, 18 巻, p. 126-140, 2012
- 15) Worrell, R., Appleby, M.C.: Stewardship of Natural Resources: Definition, Ethical and Practical Aspects. *Journal of Agricultural and Environmental Ethics* 12, pp. 263-277, 2000.
- 16) Svendsen, Erika and Campbell, Lindsay K.: *Urban Ecological Stewardship: Understanding the Structure, Function and Network of Community-based Urban Land Management*, *Cities and the Environment: Vol. 1, Iss.1*, 2008
- 17) Welchman, Jennifer: A Defence of Environmental Stewardship, *Environmental Values*, 21, pp. 297-316, 2012
- 18) 環境省: 生物多様性条約,  
[https://www.biodic.go.jp/biolaw/jo\\_hon.html](https://www.biodic.go.jp/biolaw/jo_hon.html)
- 19) F. Stuart Chapin III, Martin Sommerkom, Martin D. Robards, Kevin Hillmer-Pegram: *Ecosystem stewardship: A resilience framework for arctic conservation*, *Global Environmental Change*, Volume 34, pp. 207-217, 2015,
- 20) Chapin, F. Stuart; Carpenter, Stephen R.; Kofinas, Gary P.; Folke, Carl; Abel, Nick; Clark, William C.; Olsson, Per; Smith, D. Mark Stafford; Walker, Brian; Young, Oran R.; Berkes, Fikret; Biggs, Reinette; Grove, J. Morgan; Naylor, Rosamond L.; Pinkerton, Evelyn; Steffen, Will; Swanson, Frederick J.: *Ecosystem stewardship: sustainability strategies for a rapidly changing planet*.

- Trends in Ecology & Evolution. 25(4), pp. 241-249. 2010
- 21) Cockburn, Jessica & Cundill, Georgina & Shackleton, Sheona & Rouget, Mathieu : The meaning and practice of stewardship in South Africa, South African Journal of Science Volume 115, Issue 5/6, 2019
  - 22) Krasny, M.E. and Tidball, K.G. : Civic ecology: a pathway for Earth Stewardship in cities. *Frontiers in Ecology and the Environment*, 10, pp. 267-273, 2012
  - 23) Svendsen, Erika and Campbell, Lindsay K : Urban Ecological Stewardship: Understanding the Structure, Function and Network of Community-based Urban Land Management, *Cities and the Environment*, Vol.1,1, Article 4, 2008
  - 24) Romolini, M., Brinkley, W.R., & Wolf, K.L.: What is urban environmental stewardship? Constructing a practitioner-derived framework, Res. Note PNW-RN-566. Portland, OR: U.S. Department of Agriculture, Forest Service, Pacific Northwest Research Station. p.41, 2012
  - 25) Bennett NJ, Whitty TS, Finkbeiner E, Pittman J, Bassett H, Gelcich S, Allison EH: Environmental Stewardship: A Conceptual Review and Analytical Framework. *Environ Manage* 61(4), pp. 597-614, 2018
  - 26) Johan Peçanha Enqvist, Simon West, Vanessa A. Masterson, L. Jamila Haider, Uno Svedin, Maria Tengö : Stewardship as a boundary object for sustainability research: Linking care, knowledge and agency, *Landscape and Urban Planning*, Volume 179, 2018
  - 27) Leopold, Aldo : A Sand County almanac, and Sketches here and there, Oxford Univ. Press, 1949
  - 28) Deci, E. L., & Ryan, R. M. : Self-determination theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology*, pp. 416-436, 2012
  - 29) Thomas G. Measham & Guy B. Barnett : Environmental Volunteering: motivations, modes and outcomes, *Australian Geographer*, 39, 4, pp. 537-552, 2008
  - 30) Bramston P, Pretty G, Zammit C : Assessing environmental stewardship motivation, *Environment and Behavior*, 43, pp. 776-788, 2011
  - 31) Wunder S : The efficiency of payments for environmental services in tropical conservation. *Conservation Biology* 21, pp. 48-58, 2007
  - 32) Ryan RL, Erickson DL, De Young R : Farmers' Motivations for Adopting Conservation Practices along Riparian Zones in a Midwestern Agricultural Watershed, *Journal of Environmental Planning and Management* 46, pp. 19-37, 2003
  - 33) Sen A : Resources, Values, and Development. Harvard University Press, Boston, MA, 1984
  - 34) Nathan Bennett, Raynald Harvey Lemelin, Rhonda Koster, Isabel Budke : A capital assets framework for appraising and building capacity for tourism development in aboriginal protected area gateway communities, *Tourism Management*, Volume 33, Issue 4, 2012
  - 35) Green, G.P. and Haines, A. : *Asset Building and Community Development*, 2nd Ed. Sage Publications, Los Angeles. 2008
  - 36) Murtinho, F., Eakin, H., López-Carr, D. et al. : Does External Funding Help Adaptation? Evidence from Community-Based Water Management in the Colombian Andes. *Environmental Management* 52, pp. 1103-1114, 2013
  - 37) Larrosa C, Carrasco LR, Milner-Gulland EJ : Unintended feedbacks: challenges and opportunities for improving conservation effectiveness, *Conserv Lett* 9, pp. 316-326, 2016
  - 38) Courtney P, Mills J, Gaskell P, Chaplin S: Investigating the incidental benefits of environmental stewardship schemes in England, *Land Use Policy* 31, pp. 26-37, 2013
  - 39) Marshall NA : Adaptive capacity on the northern Australian rangelands. *Rangel J* 37, pp.617-622, 2016